

植木センターだより

令和元年 第2号 (Vol. 137)



ナツツバキ(別名:シャラノキ)

ナツツバキ (別名: シャラノキ) は、ツバキ科の落葉高木で、白色一重の清楚な花を咲かせ、侘び寂びの趣を好む日本人にぴったりの花木です。

茶の湯どころとして知られる稲沢市で‘利休七選花’の呼び名を持つ伝統の茶花の一つに数えられ、植木センターでは、利休七選花園で6月中旬に花を咲かせます。

目次

調査研究の現場から「緑化木の耐暑・耐乾対策について の調査」	2
トピックス いなざわ梅まつり‘樹木ウォッチング’	4
緑化木の主要害虫 No.22 (アゲハ)	7

－調査研究の現場から－

愛知県植木センターでは、植木生産の効率化、技術向上を図るため、調査研究を行っており、令和元年度は次の3課題に取り組んでいます。

- ・長期休眠型種子の休眠打破についての調査（平成29年度～令和元年度）
- ・日照条件の違いによる耐陰性樹種の生育についての調査（平成30年度～令和2年度）
- ・緑化木の耐暑・耐乾対策についての調査（令和元年度～令和3年度）

ここでは、今年度から新たに取り組んでいる「緑化木の耐暑・耐乾対策についての調査」の実施状況を紹介します。

緑化木の耐暑・耐乾対策についての調査 (令和元年度～令和3年度)

1 調査目的

近年、日本の夏の平均気温は上昇傾向が続いており、昨年（平成30年）は名古屋でも40.3度の最高気温を記録し、観測史上初めて40度を超えました。

今後も夏期の高温傾向が継続することが懸念され、苗木の生産現場や公園・緑地などでは暑さや乾燥から緑化木を守るための対策が必要となります。

そこで、緑化木の暑さ対策、乾燥対策として効果的な方法を探るとともに、暑さ・乾燥に強い樹種を選定するための調査を行います。

2 調査方法

本年度は、次のとおり暑さや土壌の乾燥を緩和するための様々な方法を試行して、その効果を検証します。

翌年度以降は、広く流通している樹種の暑さ・乾燥に対する耐性を調べて、植栽樹種を選定する際に参考となる資料を作成します。

(1) 暑さ対策についての調査

①寒冷紗で遮光し、日差しや気温上昇を緩和する効果を調べます。

- ・寒冷紗で遮光する。
- ・遮光しない（対照区）。

②グランドカバー等で地表面を覆い、地表面の温度上昇を緩和する効果を調べます。

- ・地表面をわらで覆う。
- ・クローバーを植えて、地表面を覆う。
- ・裸地とする（対照区）。

(2) 土壌の乾燥対策についての調査

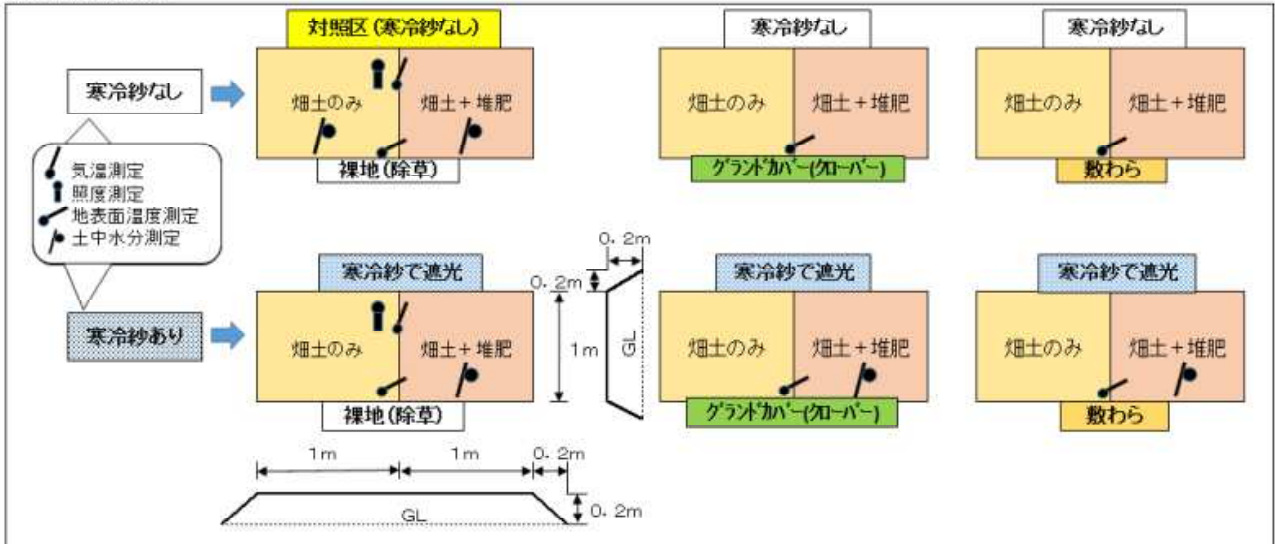
①畑土に堆肥を混入し、保水力を高める（土中水分の保持）効果を調べます。

- ・畑土のみ（対照区）
- ・畑土：堆肥＝1：1

②グランドカバー等で地表面を覆い、土中の乾燥を緩和する効果を調べます。

- ・地表面をわらで覆う。
- ・クローバーを植えて、地表面を覆う。
- ・裸地とする（対照区）。

調査区の設定



調査区別測定項目一覧

区分	寒冷紗なし						寒冷紗あり					
	畑土のみ			畑土+堆肥			畑土のみ			畑土+堆肥		
	裸地	クローバー	敷わら	裸地	クローバー	敷わら	裸地	クローバー	わら	裸地	クローバー	敷わら
	(対照区)			(対照区)								
気温	○			(○)			○			(○)		
照度	○			(○)			○			(○)		
地表面温度	○	○	○	(○)	(○)	(○)	○	○	○	(○)	(○)	(○)
土中水分	○			○						○	○	○

()は重複:中央で測定

調査区設定状況



① 堆肥区の土を撤去している状態



② 畑土：堆肥 = 1 : 1



③ 混合状況



④ 混合土を戻している状況



⑤ 元型に戻した状況



⑥ クローバーの植付状況



⑦ 敷わらと寒冷紗掛け



⑧ 設定完了



⑨ 寒冷紗の内部状況

トピックス — いなぎわ梅まつり‘樹木ウォッチング’ —

稲沢市と稲沢市観光協会主催による「いなぎわ梅まつり」は、植木センターの年中行事としてすっかり定着し、今年も盛大に開催されました。

初日の3月2日は、風もなく暖かい日差しに恵まれて絶好の梅見日和となり、大勢の来場者で賑わいました。

ここでは、梅まつりの催しの一つとして行われた‘樹木ウォッチング’を紹介します。

樹木医の説明を受けながら植木センター施設内の木々を見て回る催しで、樹木の生態や庭木の管理などに関心のある方が毎年多数参加されます。

以下、講師の説明内容を抜粋して紹介します。

<3月2日（土）午前>

初日午前の‘樹木ウォッチング’で講師を務めていただいたのは、植木の生産販売や造園の設計施工を営んでおられる（株）文化農園の代表取締役 大崎和生さんです。

場内放送で参加者を募り、本館前で案内板を掲げて集合場所をお知らせしていると、徐々に参加者が集まり、開始予定の11時30分には約15名が集まりました。

講師の自己紹介の後、本館前のクスノキやケヤキの解説からウォッチングはスタートしました。

「公園に植えられている代表的な樹種で、クスノキは常緑、ケヤキは落葉です。どちらも大木になり、クスノキは防虫剤の材料となる樟脳を抽出する木です。」

すぐ隣に植えられているクロマツの仕立て物の前では、「現在の天皇陛下が皇太子の頃にここ（植木センター）にお越しになった記念に植栽されたものです。稲沢市は仕立ての技術に定評がありますが、仕立て方は地域によってそれぞれの特徴があります。」

マツと言えば、葉が2本のクロマツやアカマツを思い浮かべますが、これらの二葉松の他にも「ゴヨウマツや高い山にあるハイマツは葉が5本ある五葉松、葉の長いダイオウショウは三葉松です。」

コニファー園では、「コニファーは西洋の針葉樹の総称で、以前大流行したことがあります。日本の風土に合うかどうかとも分からないままに導入されましたが、合わないものも多く、流行は収束しました。」



講師の大崎和生さん



続いて、ハナミズキやベニサザンカ、マンサク、ミズキなどを見て回りました。

「日本では花を見ながら季節の移ろいを感じていましたが、新年になって初めに咲くのがロウバイ、続いて、春に先ず咲くことから名づけられたマンサク、最近では常緑のトキワマンサクが垣根などに使われます。次に咲くのはヒュウガミズキやトサミズキでしょうか。」

コアラの餌として知られているユーカリの前では、「成長が早く、世界でも最大級の木のひとつで、120mのものもあります。葉は油分が多く他の動物が食べると下痢を起こしてしまうそうです。」

この後も、通路沿いに植栽されているレッドロビンやヤマモモ、ヤマコウバシ、コウヤマキ、ムクロジなどの説明を受けながら進行し、予定をオーバーして12時20分頃に終了しました。

<3月2日（土）午後>

午後の講師は「名古屋ウェディング&フラワービューティー学園」のフラワー科で園芸・造園の講師を務めておられ、昨年退職された中村隆さんです。

中村さんは主にウメ品種園でウメに関する解説をしていただきました。

「ウメは、花を觀賞する花梅と実を利用する実梅に分けられます。日本には実梅は約100種類、花梅は約300種類あり、この植木センターには104品種約200本のウメが植栽されています。」

梅の花の一覧が掲示してある前で、ウメの分類や系統の話から始まりました。

「花梅は、野梅系、緋梅系、豊後系の三つの系統に分類されます。野梅系は原種に近い系統でとても良い香りがします。緋梅系はいわゆる紅梅で庭木によく使われます。豊後系は梅とアンズの雑種で花は桃色で大きいのが特徴です。」

ウメ品種園は、見ごろを迎え、風もなく暖かい天候にも恵まれて大勢の来場者で賑わっており、先生の興味深い話に聞き入る人が次第に増えて、スタート時には20人程度だったウォッチングの参加者はいつの間にか40人を超えるほどに膨れ上がりました。

「梅は日本人に馴染みの深い木ですが、原産は中国で、奈良朝以前に薬用植物として我が国に入ってきました。万葉集にはウメを詠んだ歌が119首あり、サクラの40首より多く詠まれています。」



講師の中村隆さん



通路沿いのウメを見ながら進行すると、品種が多いのでまだ蕾ばかりの木もあり、見頃を過ぎた木もあります。

「一般的に野梅系は早咲きで、豊後系は遅咲きですので、蕾の多い木は豊後系です。」

と言われて、蕾ばかりの木の樹名板を見ると確かに豊後系の表示が・・・。

‘冬至梅’や‘道知辺’など早咲きで正月の松竹梅に使われる品種や紅白を咲き分ける‘思いのまま’などの説明もあり、最後にカワヅザクラの前では、ウメとサクラを掛け合わせた‘エレガンスみゆき’の紹介があり、終了しました。

<3月3日（日）午前>

梅まつり二日目は、時々小雨が降るあいにくの天気となりました。

本日の講師は、愛知県樹木診断協会会員の築ヶ瀬亨さんです。

「クスノキはどこにでもありますが、山の中に自生している木ではありません。葉の特徴は葉脈が3つに分かれる三行脈で、葉脈の付根には小さなこぶがありますが、これはダニが棲み付いてできるダニ室です。」と、いきなり学術的な話から始まりました。

初めて聞く話でしたので、葉を取ってよく見ると、確かに3本の葉脈の分かれ目に極小さな膨らみがありました。

次に、ウメの分類や品種の話になり、「種子からは同じ性質の木はできません。多種のウメを選抜して人工交配し、新品種は接ぎ木で生産します。」

「梅干しで有名な‘南高’は、和歌山県の高田さんという人が大きな実のなる優良種を見つけ、これを母樹として増殖を行い、その後、県立南部高校で調査研究の結果、最も優れたものを‘南高’と名付けて発表したものです。」

シダレウメの前では、「シダレウメはなぜ枝垂れると思いますか？」

「枝は日当たりの良い上側は太くなって、枝を上を持ち上げますが、ジベレリンという植物ホルモンの生成が不良な種では、年輪が同心円状になるため枝垂れるのです。」

あいにくの天気のため、参加者は7～15人程度と少なかったですが、関心のある人は興味深そうに真剣に耳を傾けました。

タブノキの前では、「冬芽はドリルのような芽をしていますが、芽吹きによりリング状の痕跡が残るので、成長の過程が分かります。」

最後は、カワヅザクラの前で、サクラの品種や開花時期、樹木の寿命などの話があり、終了しました。午後も築ヶ瀬先生が講師で、ほぼ同様の説明がありました。



講師の築ヶ瀬亨さん



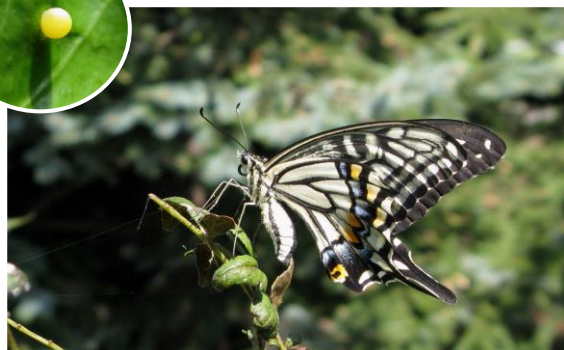
アゲハ

チョウ目（鱗翅目）アゲハチョウ科



上: 若齢幼虫 H21.9.2 ミカン
下: 中齢幼虫 H21.9.18 スダチ

円内: 卵(H22.8.11 ハッサク)



成虫(産卵?) H23.9.8 アサクラサンショウ



老齢幼虫 H22.8.9 カラタチ



多発すると小木は丸坊主にされる H22.9.15 アサクラサンショウ

1. 発生樹種

柑橘類、サンショウ、カラタチ

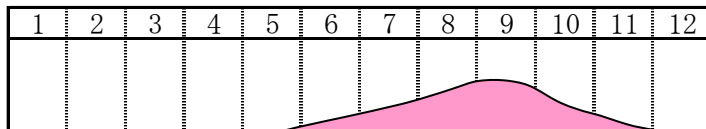
2. 害虫の特徴（発生時期、形態等）

年3～4回の発生で蛹越冬します。幼虫は5月下旬に出現し、11月まで見られますが世代交代の時期ははっきりせず、若齢～老齢が混在します。卵は1粒ずつ産むので、幼虫が群生することはありません。

幼虫の発生は、暑さのピークが過ぎた8月下旬～9月中旬に最も多くなり、以後徐々に減少します。

若齢時は全体暗褐色ですが、終齢になると全体鮮やかな緑色になり、蛇の目状の斑紋が表れ、体長は45mmに達します。

触れると、橙黄色の臭角を出し、柑橘類が腐ったような臭いを発します。



3. 被害の特徴

多発することは少なく、通常は部分的な被害で済みますが、老齢幼虫の食害量はかなり多く、若木に集団発生すると葉が全て食べ尽くされることがあります。

4. 対策

幼虫は葉上にいてよく目立つので、見つけ次第捕殺し、多発した場合は薬剤散布が必要となります。